

一、はじめに

日本語の形容詞には「荒い」、「痛い」などのように「Xい」という語構成を持つ形容詞と「美しい」、「荒々しい」などのように「Xしい」という語構成を持つ形容詞がある。そのうち、「荒々しい」、「痛々しい」のように「XXしい」という語構成の形容詞は反復形容詞と呼ばれる。反復形容詞は派生元の語幹を重ねたものに接辞「-しい」が付け加えられ、結合したものである。反復形容詞には派生元の語幹「X」が存在するが、反復形容詞の「X」は、語幹ではなく、重ねた部分「XX」が語幹で、「XXしい」全体が1つの形容詞である。

先行研究においては、反復形容詞である「荒々しい」についての意味解釈について、下記のようなものが取り上げられている。

- (1) 今にして思うのだが、私の旅の衝動には海の暗示があり、その海におそらくこんな人工的な港の海ではなくて、幼時、成生岬の故郷で接していたような、生れたままの姿の荒々しい海であった。 (頼 2001:99)
- (2) 小屋の外に獣の荒々しい息づかいが聞こえた。 (飛田・浅田 1991:35)
- (3) 荒々しく床を踏みならず。 (荒川 2006:81)

(1) の「荒々しい」は「波が激しく動いている海の状態を表すだけではなく、見ている主体の、発作的に行動するような不安の気持ちをも表しているのではなかろうか」と頼 (2001) が指摘している。そして、飛田・浅田 (1991) では、(2) における「荒々しい」は「行為、態度などがいかにも乱暴である様子を表し、ややマイナスイメージの語である」と述べている。荒川 (2006) では、(3) における「荒々しい」は「行為や態度が乱暴・粗雑である」という好ましくない意味であるとしている。よって、上述したものは、表1のようにまとめられる。

¹ 下線は筆者である。以下同様。

表1 「荒々しい」の意味解釈

先行研究	「荒々しい」の意味解釈
頼 (2001)	ものの状態を描写する。または、情意的意味を表す。
荒川 (2006)	行為や態度が乱暴・粗雑である。好ましくない意味。好ましくない自然風景を描写する。
飛田・浅田 (1991)	行為、態度などがいかにも乱暴である様子を表す。ややマイナスイメージの語である。

しかし、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を検索したところ、上記の先行研究の意味解釈に合わない「荒々しい」の用例が見受けられる。

(4) 駿河湾と相模湾のキレイな海岸風景や、天気がよければ富士山の眺望など、伊豆の景勝地が連なっている。荒々しい海岸美、雄大な白浜、夕景で赤く染まった水面など、さまざまな顔を持つ海景色が堪能できるはず。(BCCWJ)

荒川(2006)では、「荒々しい」は好ましくない状態・場合を描写する時に用いられると指摘している。しかし、例(4)に見るように、「荒々しい」は海岸美を修飾するのに用いられている。「海岸美」に「美」というプラスの単語と共起するほか、「雄大な白浜」というプラスイメージの表現も並べられているため、この場合の「荒々しい」はマイナスイメージを含意するとは言えない。また、先行研究では語のマイナス評価とプラス評価は何によるものなのか明らかにされていない。このように、意味面から「荒々しい」の意味用法を説明することは困難であろう。

本論では均衡コーパス BCCWJ の実例を見ることを通し、近年研究が盛んになっている認知言語学の理論を援用し、語の形態や語構成、機能だけではなく、「荒々しい」の意味ないしメカニズムを明らかにしたい。よって、まず身体性メタファーに関する理論的な枠組みをみる。次に、「知覚推論」、「Sモード」、「評価性」に基づき、「荒々しい」の意味を考察する。最後に、「荒々しい」の意味拡張のメカニズムを提示する。

二、理論的な枠組み

本論は考察対象の「荒々しい」の意味間の関係を明らかにするために、鍋島 (2011) の身体性メタファー理論を導入する。鍋島 (2011) が提案した身体性メタファー理論は「知覚推論」、「Sモード」、「評価性」といった概念が含まれている。「荒々しい」の意味拡張のメカニズムを考察する前に、まずこれらの概念を見てみたい。

例えば、例文(5a)において、視覚により<赤>と触覚により<熱い>の間の連想関係も知覚推論の一種「共感覚」である。例文(5b)の形容詞<黒い>は「知覚推論」により、例文の「顔を真っ黒」と例文の「真っ黒になったワイシャツの襟首」であっても、意味的には<墨のような色だ>ではなく、<汚れる>と指している。すなわち、(5b)の例文では、言語的には「黒」であっても意味的には<汚れ>と捉えられている。

(5) a. 共感覚 : 真っ赤になった日本刀。

b. 知覚推論 : 黒い → 汚い。

健次は、顔を真っ黒にして納屋からできてた。

真っ黒になったワイシャツの襟首。

(鍋島 2011:74)

例文(a)の視覚の<赤>を見れば触覚の<熱さ>を連想し、逆に触覚の<熱さ>からは視覚の<赤>を連想しやすいことから、知覚推論は「双方向的」だと鍋島 (2011) が指摘している。つまり、「双方向的連想関係 (あるいは、連続的対応関係)²」という推論である。

本論文は「共感覚」と「知覚推論」の概念を利用し、反復形容詞のメカニズムを

² ある現象A (知覚や概念を含む) と別の現象Bの関係は、確率論的であって、決まっているものではない。その際にその中間が連続的に存在すること (<重い>と<遅い>であれば、「非常に重い」「重い」「やや重い」「重くない」「やや軽い」「軽い」「非常に軽い」は、それぞれ「非常に遅い」「遅い」「やや遅い」「遅くない」「やや速い」「速い」「非常に速い」に対応するなど) を連続的対応関係と表現している (鍋島 2011 : 75)。

分析する。但し、知覚レベル構造はこの二つの概念だけではなく、Sモードがある。

「Sモード」とは、自己を対象化した概念化が客観的、自己を対象化しない概念化が主観的であると鍋島（2011）が指摘している。「Sモード」とは、自己と状況を中心とし、視点とパースペクティブを伴った認知モードのことである。「Sモード」のSは「Subjective（主観的）」、「Self-centered（自己中心的）」、「Situated cognition（状況認知）」の略である。具体的には（6a）と（6b）のような同じ命題を異なる視点で捉える用例を見ていく。

(6) a. Anne is sitting across the table from me. (図1)

b. Anne is sitting across the table. (図2)

(鍋島 2011:30)

(6a) と (6b) は同じ命題を描写しているが、視点が異なり、主観性の度合いも違う。それぞれ図1及び図2のように描き示すことができる。

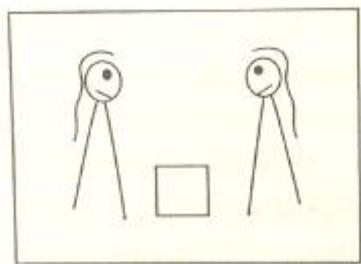


図1 例文 (6a) の図示

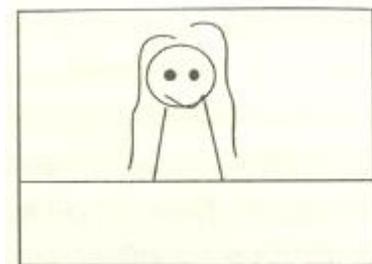


図2 例文 (6b) の図示

(鍋島 2011:31)

(6a) は「from me」が言語化されているように、「私」という発話者を客体化する視点を置き、観察主体から眺める方向性を反映した「Oモード」の表現である。一方、(6b) は「from me」が言語化されていないように、「私」という発話者は主観的な視点を置き、同時に観察者の視点に映る主観的な映像をより直接的に反映した「Sモード」の表現である。鍋島（2011:31）によれば、(6b)（図2）では

「across」の基準点が言語的に表現されていないが、デフォルト的に発話者であると理解される。つまり、実際の視覚的体験においては、自分自身は視野に存在せず、テーブルとその向こうにいる Anne しか見えないため、(6b)の意味をそのような経験の自然な反映として理解できる。

従来の研究では、日本語の数多くの形容詞の中に人称制限がかかる形容詞が存在することが指摘されている³。例えば、益岡 (2000) によれば、「嬉しい」は「あ、嬉しい！」というように自分の感情を表現することができるが、第三者について、「*彼は嬉しい」とは言えず、「彼は嬉しそうだ」もしくは「彼は嬉しがっている」などのように変形しない限り、文が成立しないという。

本論文は「Sモード」は反復形容詞に見られる意味拡張の説明にも有効だと考える。

次に、評価性についてみる。「評価性」が一般に、「価値 (value)」、「判断 (judgment)」、「評価 (evaluation)」と呼ばれる概念と同一だと考えられる。「好きな」、「いい」のような表現を「プラス評価性」と、「嫌な」、「悪い」のような表現を「マイナス評価性」と呼ぶ。

西尾 (1972:197) によると、語は語自体の評価性とコンテキストにおける評価性があるという。例えば、「長い話で閉口した」という「長い」は評価的に、中立的な語だと考えられるが、同じ語基「ナガ」を持つ形容詞「長たらしい」は、「*長たらしい話をどうもありがとうございました」のように用いられないため、マイナス評価性を持つ表現だと考えられる。次に、もう1つ例をあげてみる。「となりの花は赤い」ということわざは、「となりの花というものは、とかく自分の家の花よりも。赤さも鮮やかさに美しくよく見えるものだ (そのように、よそのものは自分のものよりよく見えるものだ)。」のように解しうるとすれば、「赤い」の部分がこの文脈ではよい評価を伴って使われているように見える。しかし、「赤い」自身は「目が赤くなる」、「赤い痰がでる」等々の例がいくらでもあることから自明なように、評価とは無関係な語である。

また、本論ではプラス評価性を持つか、マイナス評価性を持つかを判断する方法

³ 西尾 (1982) では、「客観性形容詞と主観性形容詞」 (『日本語教育事典』) による「人称の制限」を指摘している。

として森田（1980）のテストを導入することとする。

森田（1980）は、「a. 美人で (+) しかも 高給取り (+)」と「b. ?美人で (+) しかも 引きこもり (-) ←衝突」の2例を見るように、前者の「美人」という一般的にプラス評価性を持つと思われる語は、後者の「高給取り」と共起することから、「高給取り」も同じくプラス評価性を持つ語であると考えられる。しかし、例bに見るように、後者の「引きこもり」という一般的にマイナス評価性を有すると思われる語は、前者の「美人」というプラス評価性を有する語とは衝突を起し、違和感が生じる⁴。

以上から、森田（1980）の「しかも」テストをまとめてみると表2のようになる。文においては、前者と後者の共起関係は表2に示したように成立する場合は2つしか見られない。1つは、前者は一般的にプラス評価性を持つ語だと認定した上で、後者はプラス評価性を持つ語だと認定することが可能である。もう1つは前者は一般的にマイナス評価性を持つ語だと認定した上に、後者はマイナス評価性を持つ語だと認定することが可能である。

表2 森田（1980）の「しかも」テスト

後文 \ 前文	プラス評価性 (+)	マイナス評価性 (-)
プラス評価性 (+)	成立	不成立
マイナス評価性 (-)	不成立	成立

三、分析

(一)「荒々しい」の知覚推論

以下では、「荒々しい」の意味について見ていく。田（1998）は「荒々しい」は主に人間の表情・言動・性質を形容すると指摘している。連体修飾に用いられる「荒々しい」と共起する語は、例えば、人使い／態度／気性／顔つき／があり、人の状態や動作などを描写することができる。また、連用修飾に用いられる「荒々しく」と共起する語は、例えば、[仕事／細工／計算]をするなどがあり、物の動きを描写することもできる。しかし、田（1998）は「仕事が荒々しい・荒々しい仕事」といった物の状態・

⁴ この場合、例えば、「内向的な美人を引っかけて騙してやろう」とでも思っているヒモのような視点でも設定しないと理解しがたいと森田(1980)が指摘している。

内容を表すことはできないとしている。

しかし、同じ人の動作を描写する「荒々しい」の場合でも、感覚（触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚）によって用いられるものと用いられないものがあることは筆者の知る限りでは今まで指摘されていない。例えば、以下の例を参照する。

(7) 瞬間、気持より先に、秋葉の手が霧子の肩口をとらえた。いままで、秋葉は霧子に暴力をふるったことはない。霧子といわず、女性に対して荒々しい行為をしたことはない。 (BCCWJ)

(8) 荒々しい足音が、近づいてきた。ノックもなく、会議室の扉が開く。焼田署交通課長が立っていた。顔色は蒼白だ。署長が腰を浮かせて言った。 (BCCWJ)

(7) は視覚を通し、人の動作を描写する場合であるが、(8) は聴覚を通し、人の動作を描写する場合であると考えられる。しかし、「荒々しい」は嗅覚、味覚、触感を通し、人の動作を描写する場合は不自然になる⁵。このような知覚の中の感覚モダリティ相互間の意味拡張は先行研究では詳しく言及されていない。本論は「荒々しい」の五感により、感覚転用⁶の方向性を分析し、意味拡張に規則性を明らかにする。

松浪他 (1983:771) と貞光 (2005:49) によると、共感覚表現とは「ある感覚領域を表す語が別の感覚領域に転用される比喩的な用法」である。例えば、基本的に色や形は視覚で、音や声は聴覚で、食べ物の味は味覚で、匂いは嗅覚で、温度や圧力は皮膚感覚によって知覚する。このような感覚器官と刺激の対応は言語にも反映されるが、一方で多様な感覚を同時に働かせた共感覚表現という表現もある。具体的には以下の例が挙げられる。

⁵ コーパスでは、嗅覚、味覚、触感を通し、共起する用例が見当たらないが、検索エンジン Yahoo!JAPAN では、「荒々しい匂い」は 1,290 例であり、「荒々しい味」は 2,040 例であり、「荒々しい肌触り」は 218 例であり比較的例が少ない。本論ではコーパスの用例に基づき、分析を行われ、検索エンジン Yahoo!JAPAN の用例を排除されることになる。(2016.6.9)

⁶ 感覚転用は「未分化の感覚から分化された感覚へと起きしやく、逆は起きにくいとされた」(Ullmann1957)。

(9) 暖色／寒色

(10) あまい声

(貞光 2005:49)

(9) では、触覚を表す語「暖」と「寒」が視覚領域の「色」に、(10) では、味覚を表す「あまい」が聴覚領域の「声」に転用されている。ただし、このような、人間の五感間で、ある感覚を表すために本来別の感覚に用いられる表現が転用される共感覚の方向は全く自由というわけではない。Ullmann (1957) によれば、感覚間に一方向の拡張の傾向がある。ここでは、Ullmann (1957) と共にその考えを継いだ山梨 (1988)、深田・仲本 (2008) も見ることにする。

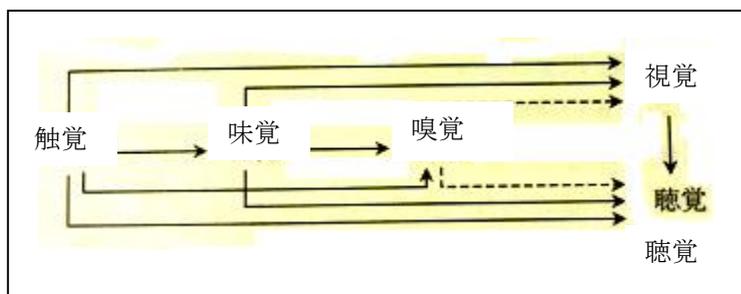


図3 五感の修飾・被修飾関係 (山梨 1988)

Ullmann (1957) は、五感覚のうち触覚、味覚、嗅覚の3つの感覚は「より低次」の感覚概念である。一方聴覚と視覚は「より高次」の感覚概念とみなされてきた。そして、この階層性においてより低い感覚概念がより高い概念を表現するために使用される傾向があるとしている。山梨 (1988) は図3のように示している。深田・仲本 (2008) の日本語の用例を借りて見ると以下の通りである。

- (11) a. 甘い香り [味覚→嗅覚]
- b. 暖かい色 [触覚→視覚]
- c. 鋭い悲鳴 [触覚→聴覚]
- d. *にがい感触 [味覚→触覚]
- e. *くさい形 [嗅覚→視覚]

f. *黄色い匂い [視覚→嗅覚]

(深田・仲本 2008:117)

(11a) ～ (11c) はいずれも成立し、より低い感覚概念がより高い概念を表現する。それに対し、(11d) ～ (11f) はいずれも成立せず、より高い感覚概念がより低い概念を表現する。

「荒々しい」に戻ると、まず、コーパスにおける「荒々しい」の用例を見ていく。

(12) 瞬間、気持より先に、秋葉の手が霧子の肩口をとらえた。いままで、秋葉は霧子に暴力をふるったことはない。霧子といわず、女性に対して荒々しい行為をしたことはない。 (BCCWJ)

(13) タクヤは、自分のジーンズのファスナーが乱暴に降ろされるのを感じた。そのまま、荒々しい手付きでブリーフごとジーンズが脱がされる。 (BCCWJ)

(14) 荒々しい足音が、近づいてきた。ノックもなく、会議室の扉が開く。焼田署交通課長が立っていた。顔色は蒼白だ。署長が腰を浮かせて言った。 (BCCWJ)

(15) 「僕は四歳の弟以外に後継者のいない身で、本来そのような危険をおかすことは許されない」ブロンズ色の顔が青ざめていた。彼は険しい顔つきで携帯電話を取りだし、荒々しい声で続けた。 (BCCWJ)

まず、「荒々しい」の共起関係を見ていく。(12)の「行為」と(13)の「手付き」は人間の動作に属し、視覚器官である目から確認できる人間の体の反応である。そして、(14)の「足音」と(15)の「声」は人間が発声器官を使って出す音に属し、聴覚器官である耳から捉える音である。

では、(12)と(13)のような人間の動作と共起する場合と(14)と(15)のような人間が発声器官を使って出す音と共起する場合はどう関連しているのか。

(12)と(13)のような、人間の動作と共起する視覚感覚概念はより低い概念である。(14)と(15)のような、音、声と共起する聴覚感覚概念はより高い概念である。

まず、(12)と(13)の視覚感覚と(14)と(15)の聴覚感覚との関連は「共感覚」の一種と見なすことができる。そして、両者を比べると、(12)と(13)の方が基本的表現であり、具体的な人間の行為や動作などを描写する<具体性>、<観察可能性>という特徴を満たしている。

Ullmann (1957) によれば、転用の方向性はより低い感覚概念がより高い概念を表現するため、高次の感覚を基本的な修飾対象とする「荒々しい」は低次の感覚（触覚、味覚、嗅覚）に使うと不自然になるわけである。転用の方向性はより低い感覚概念がより高い概念を表現するために使用される傾向と一致する。そして、視覚の<行為や動作などの振幅が激しい>からは聴覚の<空気などの振動（音波）を引き起す>を連想し、共感覚に動機付けられる。

(二)「荒々しい」のSモード

次に、「荒々しい」は視覚や聴覚などの五感から直接的に捉えられない用例を見てみよう。頼 (2001) は (16) の例を挙げ、「荒々しい」が情意を表せるとしている。

- (16) 今にして思うのだが、私の旅の衝動には海の暗示があり、その海におそらくこんな人工的な港の海ではなくて、幼時、成生岬の故郷で接していたような、生れたままの姿の荒々しい海であった。 (頼 2001:99)

前節取り上げたように、頼 (2001) は「荒い波」は「波」が激しく動いている状態を描写するのに対し、(16)における「荒々しい」は海の状態だけでなく、見ている表現主体の、発話的に行動するような不安の気持ちも表しているとしている。そして、「荒々しい」が情意を表せるのは「しい」という語尾が付いていることによるのだと主張している⁷。

本論は反復形容詞が情意的意味を持っているため、主観的表現であると考え。本論では、情意的意味が出来上がった後の認知主体の主観的な視点を論じている。ここで言う“視点”とは、鍋島 (2011) が提案した「Sモード」に見るように、五感とし

⁷ 語尾辞「しい」を伴って「情意」という主観的意味を表すのではないかと蜂矢 (1998) と頼 (2008) が指摘している。

ての視点のみではなく、その他の生理的感覚や知性・心理も含めた認知主体自身を取り巻くものを指す。以下では、鍋島（2011）「Sモード・Oモード」と町田（2012）の「事態内視点・事態外視点」を取り上げ、見ることとする。

鍋島（2011）は、表3に示したように視点の捉え方により自己を中心する「Sモード」と、自己を客体化する「Oモード」に分けている。まず、「Sモード」では自己は絶対者であるが、「Oモード」では基本的にどの存在にも特権的地位が存在しないので、無限の世界の中の非常に小さな一点になる。そして、「Sモード」では絶対者としての自己が観察主体であるが、「Oモード」では特定視点からの観察という行為が存在しないので、観察主体は存在しない。

表3 「Sモード」と「Oモード」の対応関係（鍋島 2011:81）

	自己	観察主体	視点	世界	五感	哲学の系譜
Sモード	自己中心的 「絶対者」	あり	あり	いま・ここ「知覚されな いものは存在しない」	すべての感覚	現象学的
Oモード	自己客体化「世界の 中のちっぽけな一部」	なし	なし	無限	視覚から視点を捨象	存在論的

「Sモード」と「Oモード」に似た概念として、町田（2012）は「事態内視点・事態外視点」を提案している。

(17) 事態外視点とは、図4に示されるように、認知主体が外側から事態を眺めるタイプの事態把握の様式である。この視点を取った場合、認知主体は自分を分裂させ、ステージの外から事態を眺める観察者として把握された場合は認知主体が主体的把握を受けているといい、事態の参与者として把握された場合は客体的把握を受けているという。一方、図5で図示されたように、事態の中に自らの視点を置く様式を「事態内視点」と呼ぶ。「事態内視点」の特徴は、認知主体が事態内に自らを置いているために、観察者であると同時に事態参与者でもあるという点である（町田 2012:252）。

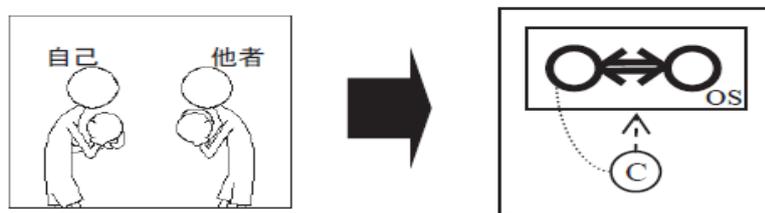


図4 事態外視点 (町田 2012 : 252)

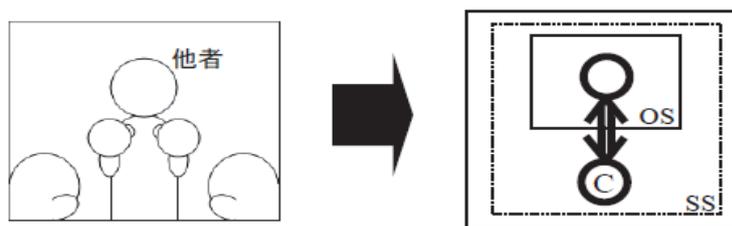


図5 事態内視点 (町田 2012 : 252)

町田 (2012) では、「事態内視点」と「事態外視点」の具体的な例を挙げてなかったが、筆者なりに説明すれば、以下のようなになる。例えば、(13)は、AさんがBさんに電話をかける会話である。

(18)場面：Aさんから電話がかかってきて、Cさんの居場所を聞いている。

発話者A：「すみません、Cさんはいますか。」

(Oモード・事態外視点の場合では) B 1：「はい、私のそばにいます。」

(Sモード・事態内視点の場合では) B 2：「はい、そばにいます。」

(著者による作例)

B 1のように、認知主体が外側から事態を眺めるため、発話者Aの質問に対し、必ず主語である「私」を表す。この場合は、鍋島 (2011) の「Oモード」、町田 (2012) の「事態外視点」に相当する。一方、鍋島 (2011) の「Sモード」、町田 (2012) の「事態内視点」の場合では、認知主体が事態内に自分を置いているため、B 2のように主語である「私」を省略するのが普通である。

以上、「Sモード」と「Oモード」を概観したが、以下では2つのモードは形容詞と

どのように関連するのか見ることとする。まず、一般的に属性形容詞と分類される「高い」を例に見る。

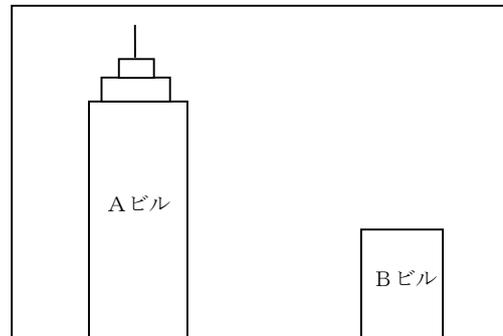


図6 「高い」の用例

仮にビルAとビルBがあるとする。この場合、ビルAを見た「高いですね」と言えるように観察者（話者）の感想を表すのに用いることもできるが「誰も高いとは見ていないが、私は高いと思う」、「誰から見ても高い」と言えるように発話者に限定されるという制限はない。つまり、主観性が低く、客観性が高いと考えられる。話者が限定されないため、鍋島（2011）の「Oモード」、町田（2012）の「事態外視点」に相当する。

次に、感情形容詞に分類される「嬉しい」を見る。周知の通り、「嬉しい」は話者の感情を表現することができるが、他人の感情を表すのには「*彼は嬉しい」に見るように用いられない。⁸発話者が一人称に限定されている点で「嬉しい」は客観性が低く、主観性が高いと言える。このように人称制限があることから、鍋島（2011）の「Sモード」、町田（2012）の「事態内視点」に相当すると考えられる。

しかし、このような視点の違いは常に固定されているものではなく、何らかの方法で人称制限を解除したり、付与したりすることが可能である。今野（2012）では、形容詞活用語尾が脱落した「ださっ」、「気持ち悪っ」などに人称制限が見られることが指摘されている。今野（2012）によれば、そのような表現は発話者の眼前の状況に対し、直感的な感覚や判断を表す場面で用いられる。また、聞き手の存在が前提

⁸ 益岡（2000）のいう「日本語の感情形容詞の感情主（感情の持ち主）に人称制限がある」ということである。

とされないので、発話者（主語）は瞬間的現在時の自分の感情・判断を表出し、省略されることが多い。例えば、「高っ、熱っ、臭っ」などは他者への伝達ではなく、話者自身の感覚や判断を表出する。客観性を持つ形容詞「高い」は語尾「い」が脱落することにより、人称制限が付与される「高っ」の主観性が高くなる傾向が見られる。

次に、人称制限を解除する形容詞の場合を見ていく。一般的に、「嬉しい」は話者の感情を表現することができるが、他人の感情を表すのには「*彼は嬉しい」に見るように用いられない。しかし、他人の感情を表す場合では、過去形の「かった」に付け加えると、「彼は嬉しかった」のように人称制限が解除されている。

寺村（1971）は、過去形によって人称制限が解除されるように見えるのは実は感情表出から主張へとムードが移行するからであると指摘している。このような形容詞変形により、人称制限が解除される「嬉しかった」の主観性はやや低くなり、客観性がやや高くなる。

従って、視点の違いは常に固定されているものではなく、過去形や語尾変化などのような方法で人称制限を解除したり、付与したりすることができる。では、「荒々しい」に戻ると、先行研究では、反復形容詞は見ている表現主体の情意的意味を表していると指摘されている。そして、本論文は、このような情意的意味は認知主体の主観的な視点「Sモード」に関わっていると考える。以下では、「荒々しい」の客観性と主観性を分析してみる。

まず、コーパスの用例を挙げ、「荒々しい」の人称制限を見ていく。

(19) 海岸線は溶岩で出来た岩が迫り出した断崖絶壁となっていて、打ち寄せる波が荒々しい表情をしていた。 (BCCWJ)

(20) 私は泥棒だと思って逃がしたものの被害はなかったのでほめられるかと思いの外、「女だてらに荒々しい」と姑にひどく叱られてしまった。

(BCCWJ)

(19)の「波」と(20)の「女」から分かるように、「荒々しい」の人称制限という制約が見られない。つまり、「荒々しい」は「高い」と同じ客観性を表し、「嬉しい」

ほど主観性が強くないと言える。しかし、視点の違いは常に固定されているものではない。例えば、上述した見たように、客観性を持つ形容詞「高い」は語尾「い」が脱落することにより、人称制限が付与される「高っ」の主観性が高くなる傾向が見られる。「荒々しい」はこのような変形により、人称制限が付与されるかどうかを検証する。例えば、

(21) *山、荒々しっ。 (著者による作例)

(22) *声、荒々しっ。 (著者による作例)

(21)と(22)の「荒々しい」は語尾「い」が脱落する変形が不可能である。しかし、変形することができなくても「荒々しい」は主観性を表せる用例が見られる。

(23) ツツジ公園の横を通り過ぎて、登山自動車道を上り詰めたところが終点の駐車場。目を上げれば思わずギョッとする荒々しい山肌が迫ってくる。思わず目をそらし足元を見ると、そこには高山植物がびっしりと密生している。高山植物を含め六百三十三種もの植物群があると言うのだから驚きだ。

(BCCWJ)

(23)の例は先行研究で指摘されている「情意的な意味」を持つ「荒々しい」の例であり、「高っ」と同じように聞き手の存在が前提とされないので、発話者（主語）は瞬間的現在時の自分の感情・判断を表出し、省略されることが一般である。(23)の「荒々しい」は「山肌」の状態だけでなく、見ている表現主体が自分の感情を投影した状況の表出の表現である。このような情意を表せる表現はシク活用形容詞でも見られる。例えば、「嬉しい、楽しい」なども語尾「い」が脱落することができず、語自身が表出する機能を持つと考える。このような表出する機能は「Sモード」と「事態内視点」でいう「認知主体が事態内に自らを置いているために、観察者であると同時に事態参与者でもある」と一致する。従って、「荒々しい」は「高っ」と同じように話者自身の感覚や判断を表出することを認証制限が明確にしないことから、「荒々しい」は「高っ」ほど主観性が強くないと考える。

以上で述べたことを以下のように整理しておく。本節では、「荒々しい」が情意的意味を表すメカニズムは「認知主体の主観的な視点」に関わっていると提案した。このメカニズムは、鍋島（2011）と町田（2012）の研究を用い、視点の捉え方により主観性である「Sモード」、「事態内視点」と、客観性である「Oモード」「事態外視点」に分けている。考察した結果、「荒々しい」のメカニズムを図7のように図示することができる。

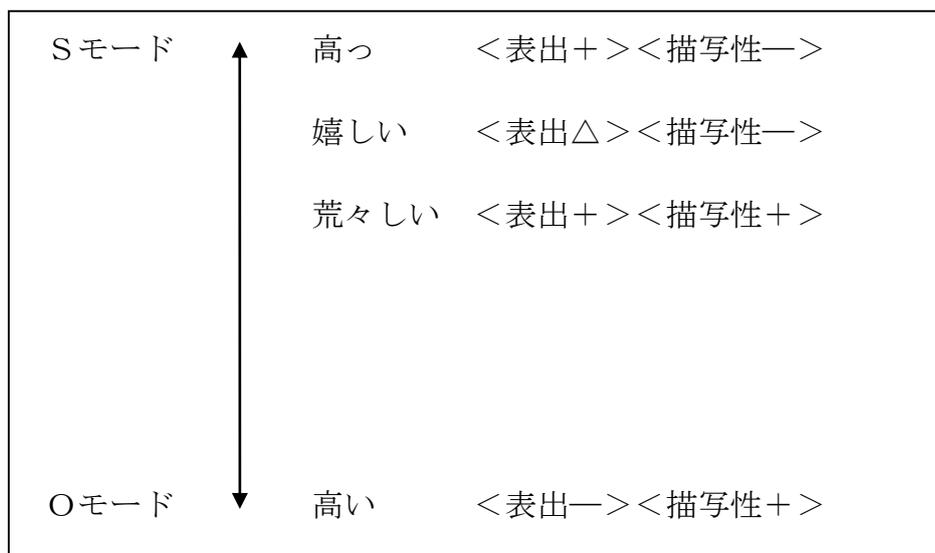


図7 「荒々しい」のまとめ

まず、「(誰から見ても) Aビルは高い」という文から、「高い」は話者が人称限定を持たないため、主観性が低く、客観性が高いと考えられる。それは、鍋島（2011）の「Oモード」、町田（2012）の「事態外視点」に相当する。そして、「嬉しい」は話者自身の感情を表現する「私は嬉しい⁹」という文を表すことができるが、他人の感情を表すのには「*彼は嬉しい」に見るように用いられない。従って、「嬉しい」は人称制限があることから、鍋島（2011）の「Sモード」、町田（2012）の「事態内視点」に相当すると考えられる。

しかし、視点の違いは常に固定されているものではない。何らかの方法で人称制

⁹ 一般的に「嬉しい」の場合では、主語（一人称）を省略されていることが多いが、「私は嬉しい」という一人称を明示する文に用いることが可能である。従って、図5には、嬉しいの<表出>の部分は「△」で示されている。

限を解除したり、付与したりすることができる。例えば、今野(2012)は、形容詞活用語尾が脱落したことにより、人称制限が見られると指摘している。「高い」は「高っ」に変形し、発話者の眼前の状況に対し、直感的な感覚や判断を表す場面で用いられる。また、「嬉しい」は変形により、人称制限が解除される「嬉しかった」の主観性はやや低くなり、客観性がやや高くなる。

最後に、「荒々しい」は「嬉しい」のように人称制限を持たないため、主観性が強くないと考えられる。しかし、「荒々しい」は「高っ」のように変形せずに、認知主体は瞬間的現在時の自分の感情・判断を表出することが可能である。

従って、「荒々しい」は「嬉しい」に比べ、人称制限を持たないため、主観性が強いが、「高っ」に比べ、変形せずに認知主体の自分の感情・判断の表出機能を持つため、主観性があると考えられる。

(三)「荒々しい」の評価性

本節では、「荒々しい」の評価性について見ていく。飛田・浅田(2008:35)は、「荒々しい」の意味が「行為、態度などがいかにも乱暴である様子を表し、ややマイナスイメージの語である」と述べている。また、荒川(2006)によれば、「荒々しい」が行為や態度が乱暴・粗雑であり、自然風景の描写に使われる場合は好ましくない意味として捉えられる。しかし、コーパスでは、(24)と(25)のように「荒々しい」は好ましい意味としても捉えられる。

(24) 景勝地や歴史スポットなどの見どころをはじめ、山海の幸を使った名物料理と特産品、さらに役立つ温泉&宿情報まで盛りだくさん。これを参考に思い思いの旅を楽しもう。・・・(略)・・・駿河湾と相模湾のキレイな海岸風景や、天気がよければ富士山の眺望など、伊豆の景勝地が連なっている。荒々しい海岸美、雄大な白浜、夕景で赤く染まった水面など、さまざまな顔を持つ海景色が堪能できるはず。(BCCWJ)

(25) この眺めを一望する小高い丘に公園があり、あいあい岬展望所や遊歩道などが整備されている。ユウスゲが花を咲かせるのは夏だ。荒々しい風景と澄んだ海が印象的な奥石廊。野猿の生息地として有名な大根島も近くにあ

る。

(BCCWJ)

(24)の「荒々しい」は「海岸美」を修飾し、(25)の「荒々しい」は「風景」を修飾し、2語は自然環境に属す。しかし、(24)と(25)の「荒々しい」は先行研究で指摘されている「いかにも乱暴である様子を表し、ややマイナスイメージの語である」と解釈することができない。従って、本論文は「荒々しい」は自然風景を描写する場合ではプラス評価性も表せると考える。

本節は、森田(1980)のテストを基準として、自然風景である「海岸や風景など」を描写する「荒々しい」はプラス評価性を持つことを明らかにする。(26)と(27)の例文では、「雄大な」という一般的にプラス評価性を持つと思われる語と「猛烈な」という一般的にマイナス評価性を持つと思われる語を前文に入れ込み、後者の「荒々しい」と共起することかどうかを見ていく。

(26)a. 海岸が雄大(+)で、かつ荒々しい(+)。

b. 海岸が猛烈(-)に暑い、かつ荒々しい(-)。 (著者による作例)

(27)a. 風景が雄大(+)で、かつ荒々しい(+)。

b. 風景が猛烈(-)で、かつ荒々しい(-)。 (著者による作例)

(26a)と(27a)の「荒々しい」は「海岸」と「風景」を修飾する場合では、前者の「雄大」という一般的にプラス評価性を持つと思われる語は、後者の「荒々しい」と共起することから、「荒々しい」も同じくプラス評価性を持つ語であると考えられる。それに対し、(26b)と(27b)の「荒々しい」は「海岸」と「風景」を修飾する場合、前者の「猛烈」という一般的にマイナス評価性を持つと思われる語は、後者の「荒々しい」と共起することから、「荒々しい」も同じくマイナス評価性を持つ語であると言える。つまり、自然風景を描写する「荒々しい」はプラス評価性とマイナス評価性を持つと考える。

では、どうして「荒々しい」は自然風景を描写する時にプラス評価性とマイナス評

価性が生じるのだろうか。以下では、それぞれの自然風景との共起頻度2回が以上のものを取り上げる。

表4 「荒々しい」と自然風景の共起頻度

{荒々しい}+自然風景		
	用例	用例数
1	{荒々しい}風	5
2	{荒々しい}【地域】	4
3	{荒々しい}山肌	4
4	{荒々しい}岩	2
5	{荒々しい}岩肌	2
6	{荒々しい}形相	2
7	{荒々しい}海	2
8	{荒々しい}海岸	2
9	{荒々しい}自然	2

表4に示すように、自然風景の地域は具体的にいうと、「日本海の海岸沿い」、「北極の氷原」、「日本海」、「ロプ砂漠」であり、他に「岩肌」、「海岸」なども含める。これらの自然風景の特徴は「雄大ですばらしい眺め」と言える。これらの自然風景の特徴に基づき、「荒々しい」との意味の関連性について下の例文を取り上げ、説明する。

(28) そのとき、機上から、荒々しい北極の氷原をみた。 (BCCWJ)

(29) 荒々しい風が吹きまくり始めた時も、帽子が風に飛ばされないよう押さえずにはいられなかったし、さらに本物そっくりの雷が突然鳴りだした時には、早く避難しなくてはと思ったほどである。 (BCCWJ)

例えば、(28)の「荒々しい」は動機付けるメタファーの元の意味「大雑把で丁寧でない部分の目立つさま」から「雄大な、壮大な」へというプラス評価の意味が付けられる。一方、「風」は他の自然風景と異なり、「雄大ですばらしい眺め」という特徴を持たない。この場合では、(29)のように「荒々しい」は動機付けるメタファーの元の意味「言動や性格などが激しいさま」から「猛烈な、はげしい」へというマイナス評価の意味が付けられる。このように本来は無関係の「意味特徴」と「評価的意味」という2つのスケールを重ね合わせることにより、客観的事実に評価的意味を付与することは「尺度融合」と大石(2007)が指摘している。表5に示すように、「荒々しい」は

自然風景を描写する時に、「意味特徴」と「評価的意味」という2つのスケールを重ね合わせる用例がある。

表5 「尺度融合」に用いられる「荒々しい」の用例

動機付けるメタファーの元領域	大雑把で丁寧でない部分の目立つさま	言動や性格などが激しいさま
評価的意味	「雄大、壮大さ(+)」	「猛烈(ー)」
{荒々しい}【地域】	そのとき、機上から、荒々しい北極の氷原をみた。	
{荒々しい}風		野分めいた荒々しい風が吹きすぎた後、急に肌寒くなった
{荒々しい}山肌	目を上げれば思わずギョッとする荒々しい山肌が迫ってくる。	
{荒々しい}岩	不動巖は、小友川と鷹鳥屋川の合流点にあり、木々に彩られた高さ約五十四メートルの荒々しい岩壁です。	
{荒々しい}岩肌	偶然見えた北アルプスは荒々しい岩肌に雪がまだかなりあるようです。	
{荒々しい}形相	西側は荒々しい形相を、東側はなだらかな姿をみせている。	
{荒々しい}海		▼美しい海...「潜在する美意識」▼荒々しい海...「感情的な争いごと」▼穏やかな海...「平和な日常」
{荒々しい}海岸	地中海沿いにコスタ・ブラバ(荒々しい海岸)という名の海岸が延びる。	
{荒々しい}自然	両側の山々にひびいて大地をどよもすような瀬の音の中に身をおき、もっと勇気を、もっと力を、あらあらしい自然に拮抗する生命の激しさを自分の身うちにかきたてたかったのではないだろうか。	

表5からみると、「荒々しい」は一般的に先行研究が指摘されている好ましくない・マイナス評価性も生じるし、プラス評価性の意味も生じる。それぞれの「意味特徴」と「評価的意味」という2つのスケールを重ね合わせる「尺度融合」を特徴付けることにより、「荒々しい」は動機付けるメタファーの元意味である「言動や性格などが激しいさま」から「猛烈な、はげしい」へ、あるいは「言動や性格などが激しいさま」から「猛烈な、はげしい」へというプラス・マイナス評価的意味が付けられる。

四、おわりに

以上では、鍋島(2011)が提案した「知覚推論」、「Sモード」、「評価性」の概

念に基づき、「荒々しい」について考察を行った。本論文では、身体性メタファー理論によって動機付けられる反復形容詞「荒々しい」の意味拡張とメカニズムを明らかにした。考察した結果は次のようにまとめられる。

- (1) 「荒々しい」は視覚概念と聴覚概念に用いられることが分かった。このような転用を説明するため、認知言語学でいう「共感覚比喻表現」という概念を導入し、「荒々しい」はより低い「視覚」がより高い「聴覚」に転用されることが明らかとなった。
- (2) 「荒々しい」は情意的意味を表すため、認知主体の主観的な視点で捉え、認知主体の心的態度が顕在化する特徴を表すことを明らかにした。このような認知主体の心的態度が顕在化する概念は鍋島(2011)が提案した「Sモード」の概念と一致する。
- (3) 先行研究では、「荒々しい」は好ましくない意味として使用されるとしている。しかし、森田(1980)のテストに基づいて、分析した結果は「荒々しい」が好ましい意味にも用いられることが分かった。それは、「荒々しい」は「意味特徴」と「評価的意味」という2つのスケールを重ね合わせる「尺度融合」を特徴付けることにより、プラスとマイナスの評価性が生じると考えられる。本論文では、「荒々しい」のみを取り上げ、分析を行ったが、「痛々しい」、「弱々しい」、「憎々しい」などの反復形容詞は同じようなメカニズムを持つのだろうか。今後はより多くのデータを集め、もっと掘り下げて検討しようと思う。また、反復形容詞の意味については比喻に基づくネットワークの分析を今後の課題として行いたい。

参考文献

- 荒正子、「形容詞の意味的タイプ」『ことばの科学 3』、319-326、むぎ書房、1989 年
- 荒川洋平、「認知意味論に基づく重複形容詞の分析」『高見澤孟先生古希記念論文集』、71-91、凡人社、2006 年
- 池上嘉彦、「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」『認知言語学論考 4』、1-60、ひつじ書房、2003 年
- 今野弘章、「独立構文としてのイ落ち構文」『言語研究 141』、5-31、日本言語学会、2012 年
- 王淑琴、「「A - い」と「A - くの」の名詞修飾用法の特徴」『政大日本研究 No. 8』、69-97、政治大學日本語文學系、2011年
- 大石亨、「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」『日本認知言語学会論文集 7』、160-170、日本認知言語学会、2007 年
- 貞光宮城、「共感覚表現の転用傾向について—嗅覚と聴覚/視覚を中心に」『認知言語学論考 NO. 5』、49-78、ひつじ書房、2005 年
- 田中茂範、『認知意味論：英語動詞の多義の構造』、三友社、1990 年
- 玉村文郎、「複合語の意味」『日本語学』第 7 卷 5 号、23-32、明治書院、1988 年
- 辻幸夫、『新編 認知言語学キーワード事典』、研究社、2013 年
- 田忠魁他、『類義語使い分け辞典—日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』、研究社、1998 年
- 寺村秀夫、「“タ”の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」『言語学と日本語問題』、313-358、くろしお出版、1971 年
- 田梅、「現代語・豊語・豊語形容詞の構造について—現代中国語・日本語・豊語形容詞—」『大学教育』第 11 号、76-87、山口大学大学教育機構、2014 年
- 長谷川明香、「味覚語「甘い」と sweet にみるメトニミー」『東京大学言語学論集』第 27 号、1 - 14、東京大学文学部言語学研究室、2008 年
- 鍋島弘治朗、『日本語のメタファー』くろしお出版、2011 年
- 西尾寅弥、『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 44)、秀英出版、1972 年
- 飛田良文・浅田秀子、『現代形容詞用法辞典』、東京堂出版、1991 年

- 深田智・仲本康一郎著、「概念化と意味の世界：認知意味論のアプローチ」『講座認知言語学のフロンティア③』山梨正明(編)、研究社、2008年
- 益岡隆志、『日本語文法の諸相』くろしお出版、2000年
- 町田章、「主観性と見えない参加者の可視化—客体化の認知プロセス—」『日本認知言語学論集』第12巻、246-258、2012年
- 松浪有、池上嘉彦、今井邦彦、『大修館英語学事典』、大修館書店、1983年
- 糸山洋介、『認知意味論のしくみ』、研究社、2002年
- 森田良行、『基礎日本語2』、角川書店、1980年
- 山梨正明、『比喩と理解』、東京大学出版会、1988年
- 頼錦雀、『現代日本語の語形成論的研究』、致良出版社、2001年
- 葉秉杰、『日本語動詞由来複合語の語形成—認知意味論の観点から—』国立政治大学日本語文学系修士論文、2010年

英語の文献

- Langacker, R. (1990) "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1-1, 5-38.
- Ullmann, Stephen. (1957) *The Principles of Semantics*. 2nd ed. Glasgow: Jackson/Oxford: Blackwell.

コーパス

- BCCWJ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』国立国語研究所